

資料紹介 Data

野間義学（宗蔵）著『古今童謡』について

大嶋 陽一

〒680-0011 鳥取市東町2-124 鳥取県立博物館

E-mail: ooshimay@pref.tottori.jp

[受領 Received 20 January 2007 ; 受理 Accepted 7 February 2007]

Notes on “Kokin Dôyô”, a collection of nursery songs and plays written by Gigaku (Sôzô) Noma (1692-1732)

Yoichi OSHIMA

Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori, 680-0011 Japan

はじめに

本稿では、平成17年度に当館が収集した近世中期の因幡地方の童謡集『古今童謡』の翻刻ならびに紹介を行うとともに、著者野間義学とその著作活動について考察を加えることを目的としている。

鳥取県内には、同じ野間義学が記した『筆のかす』という江戸中期の童謡集があったことが知られている。この『筆のかす』は、現在知られている国内の童謡集のうち、最も古いものとされているが（尾原1991）、残念ながら原本・写本とも現存していない。しかし、今回翻刻紹介する『古今童謡』は、収録内容の重複関係から『筆のかす』を底本とする抄録本であることがわかった。近世中期以前の童謡資料は、全国的に見ても少ないとされており、同書の発見が同時期の童謡研究史上で重要な資料となるとともに、近世中期の鳥取藩士の文化的活動の一端を明らかにしうる資料としても貴重である。

筆者は、童謡研究の門外漢であるため、詳細な検討は専門家に任せることとし、今回は基礎的な事項をまとめ、今後の研究の一助としたい。なお、翻刻編は本論の末尾に掲載した。

1. 『古今童謡』について

(1) 形態

『古今童謡』は、全8丁の縦帳形式の仮綴本で、寸法24.0×16.5(cm)、表紙を有しない装丁となっている（写真1参照）。著者は1頁目に「野間義学彙輯」とあることから、野間義学という人物によって編纂されたものであることが知られる。この野間義学は、鳥取県内では宗蔵（元禄5～享保17 [1692～1732] 年）という名のほうが有名であるが、江戸中期に実在した鳥取藩士である。ただし、本書は野間の作とされているものの、料紙の新しさなどから、江戸後期に別の人物によって筆写されたものと推測される。

(2) 内容

次に、内容について検討する。同書に収録されている童謡・童遊は全50件で、内訳は第1表ようになる（以下、本文中で童謡を紹介する際には、表に付した通し番号で示す）。内容的には、手まり歌や手遊び歌、鬼遊び歌、外遊び歌などの遊戯歌を中心に、子守歌や天体気象の歌、動物・植物の歌やことば遊び歌など多様なものが含まれているほか、41番「鬼々事」や42番「狼事」、43番「草履かくし」のような遊戯の仕方を記しているものもある。また、同書には8か所に遊び方を示す挿絵が描かれている（挿絵は翻刻編末尾に掲載した）。

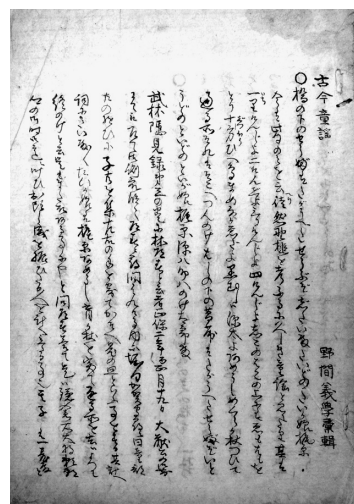


写真1

第1表 『古今童謡』所収童謡・童遊一覧および岩田勝市採録『筆のかす』との重複関係

	歌い出し文言	図番号	分類	岩田採録『筆のかす』との重複
1	橋の菖蒲は		遊戯歌	○
2	おじゃれ子どもたち		子守歌	○
3	天が紅		天体気象歌	
4	二郎よ太郎よ		子守歌	○
5	鷺にゃ尾がない		動植物歌	○
6	からすからす		動植物歌	
7	跡のからす		動植物歌	
8	棹になれ	図1-1, 2	動植物歌	○ 雁々棹になれ
9	鳶ままいろ		動植物歌	
10	すわすわ		動植物歌	
11	お月さまなんぼ		子守歌・天体気象歌	○
12	向うの山に		子守歌	○
13	雪やこんこ		天体気象歌	
14	猪のしし鹿のしし		天体気象歌	○ 猪食ひたいか
15	大山やまの		天体気象歌	○
16	地頭殿鼻の先		ことば遊び	
17	座頭の坊のしりに		ことば遊び	○ ※2曲が1曲に合体(本文を参照のこと)
18	あの子はどこの子		ことば遊び	○
19	あいつが面に		ことば遊び	○
20	歯抜けばば助		ことば遊び	○
21	おふり様の		ことば遊び	
22	鍛冶屋の職は		ことば遊び	○
23	烏のまねを		動植物歌	○
24	縁の下のごもく		ことば遊び	○
25	今日はなんの日		遊戯歌	○
26	加賀の鏡屋の		ことば遊び	○
27	起き起き小石		遊戯歌	○
28	でんでんでの虫		動植物歌	○
29	なれなれ権太郎		ことば遊び・動植物歌	
30	芋虫かわらけ		遊戯歌・動植物歌	○
31	ありの道はどう行こう	図2-1, 2	遊戯歌・動植物歌	○
32	こっちの手は金に		動植物歌	○
33	どっちの髪も		遊戯歌	○
34	爺が髭は		遊戯歌	
35	地頭どの米つき		遊戯歌・ことば遊び	○
36	ころころ馬の子		動植物歌	○
37	いれいれごんぼ	図3	遊戯歌	○
38	いれいれごんぼ (二人)	図4	遊戯歌	
39	中の中の小仏	図5	遊戯歌	○ 側の側の小仏
40	親はとも(る)とも	図6	遊戯歌	○
41	鬼々事		遊戯	
42	狼事		遊戯	
43	草履かくし		遊戯	
44	かくれ子		遊戯歌	
45	いちくたちく		遊戯歌	○
46	くいにすいに		ことば遊び	
47	大やぶ小やぶ		ことば遊び	○
48	雀の酒盛り		遊戯歌・ことば遊び	
49	地頭様手車	図7	遊戯歌	○ これは誰の手車
50	かあごかあご	図8	遊戯歌	

『古今童謡』岩田勝市(1937, 1938)より作成。

註1 『古今童謡』の分類は、(尾原 1991)を参考に行った。

註2 「岩田採録『筆のかす』との重複」の項には、重複するものに○、『古今童謡』と歌詞が大きく異なるものについて歌い出しを記した。

この『古今童謡』に収録されている童謡類は、どのような場所で採集されたものであろうか。まず考えられるのは、野間が生活していた鳥取城下や城下周辺で収録したことである。後述するが、野間は地誌や歴史書の編纂のため鳥取城下や周辺農村を踏査し、各地に残る古文書や伝承を集めており、その調査の過程で収集したものと考えられる。また、15番「大山やまの雪ころびころびや」のように、伯耆国(現鳥取県中・西部)にそびえる大山(だいせん、通称「伯耆富士」)を題材とした童謡も収録されており、因幡の近隣諸国の童謡が含まれていることが知られる。ただし、「大山やま」の類歌は、伯耆地方だけでなく因幡地方の鳥取市福部町湯山にも伝えられていることから(酒井・尾原 1985)、伯耆地方より伝播したものが収録された可能性が考えられる。

同書に収録された童謡のなかには、県内に類歌の伝承している(いた)ものがいくつか存在する(鳥取県教育委員会 1988; 酒井・尾原 1985)。それらを一覧表化したものが第2表であるが、ここから、①8件の『古今童謡』所収童謡の類歌が伝えられていること、②類歌の採集地を見ると、どの童謡もほぼ県内全域に渡っているが、「おじゃれ子どもたち」は因幡地方だけに伝承されていること(ただし、採集地と聞き取り対象者の出身地が必ずしも一致しない場合も考えられる)、③同じ童謡の類歌であっても、地域によって歌い出しの語句が変わることなどがわかる。このような類歌の存在は、今後、文献調査や聞き取り等を進めれば、数や種類が増える可能性が高い。また、同様のものが全国各地に残されているため、それらとの比較も必要であろう。

第2表 『古今童謡』所収童謡の類歌一覧

『古今童謡』歌い出し		類歌の歌い出し	類歌の採集地	出典
2	おじゃれ子どもたち	下でいの子供衆 下手の子供衆 子供衆子供衆 下中の子供衆	鳥取市国府町 (32) 鳥取市赤子田 (p30) 鳥取市福部町湯山 (p34) 岩美町田後 (p33)	民 わ わ わ
4	次郎よ太郎よ	次郎や太郎や 次郎や太郎や 次郎や太郎や 次郎や太郎や	鳥取市国府町神垣 (21) 鳥取市佐治町古市 (224) 鳥取市福部村湯山 (p 196) 湯梨浜町橋津 (432)	民 民 わ 民
11	お月さまなんぼ	お月さんなんぼ お月さんなんぼ お月さんなんぼ お月さんなんぼ お月さんなんぼ お月さんなんぼ お月さんなんぼ	鳥取市鹿野町今市 (366) 湯梨浜町橋津 (434) 湯梨浜町宇野 (438) 北栄町由良宿 (515) 琴浦町大熊 (584) 大山町羽井田 (752) 伯耆町溝口 (908)	民 民 民 民 民 民 民
12	向うの山に	向こうの山に猿が三匹 向こうの山 向こうの山から 向こうの山に	鳥取市河原八日市 (157) 八頭町船岡 (128) 北栄町由良宿 (523) 境港市朝日町 (617)	民 民 民 民
13 15	雪やこんこ 大山やまの	雪やこんこん 雪やこんこん	鳥取市福部村湯山 (p 137) 北栄町由良宿 (549)	わ 民
30	芋虫かわらけ	いも虫	北栄町由良宿 (516)	民
39	中の中の小仏	なかのなかのこうぼうさん 中の中の小坊さん 中の中の小坊さん 中の中のこうぼうさん 中の中の小坊さん 中の中の小坊さん 中の中の小坊主子	鳥取市鹿野町今市 (337) 鳥取市美和 (p114) 岩美町蒲生 (p114) 溝口町溝口 (900) 日南町印賀 (p112) 境港市芝町 (p114) 琴浦町八橋 (p116)	わ 民 民 わ 民 民 民

註1 『古今童謡』歌い出しの項目の数字は第1表と対応している。

註2 「類歌の歌い出し」の「雪やこんこん」は、『古今童謡』「13雪やこんこ」と「15大山やまの」の2つが合体したものである。

註3 「類歌の採集地」の項の斜体太ゴシックは旧因幡地方を示し、カッコ内の数字は出典に付されている通し番号および頁番号である。

註4 類歌の出典は、鳥取県教育委員会(1988)『鳥取県の民謡－鳥取県民謡緊急調査報告書－』(表中の「民」)、酒井董美、尾原昭夫(1986)『鳥取のわらべ歌』(表中の「わ」)である。

(3) 記述方法

次に、『古今童謡』の記述方法を見ていく。基本的なパターンとして、最初に野間が収集した童謡が記され、次いでその童謡の解説を付すという形をとっている。典型的な事例として、3番の「天が紅」を挙げておく。

【『古今童謡』より】

○あまがべにさいてとうとやか^トゝやにしかられしぞよ

是は日の暮になりてかがやきて空にうつり紅のこつくになるを見ていふ也

ここでは、童謡の後に、「日暮れ時、沈む夕日が空を紅色に染める情景を見てうたうもの」との解説が付いている。他にも、都市部と農村部との童謡の歌詞の違いを指摘し例示するもの（2番「おじゃれ子どもたち」）、童謡に関わる歴史的背景を指摘したもの（1番「橋の菖蒲は」）などがある。この解説は、各童謡がどのような場面で謡われていたかを知る手がかりとなるため、非常に重要な情報である。

さらに、解説を加えるにあたり、いくつかの文献を参照しているものがある。例えば、1番の「橋の菖蒲は」の解説は、林羅山『徒然草野槌』（元和7年）と齊東野人『武林隠見録』（享保3年自序）を参照に考察を加えている。また、13番の「雪やこんこ」の解説部分には、「徒然草にふれふれこ雪、たんばのこ雪」と記されており、童謡の元歌が吉田兼好『徒然草』（第181段）の「ふれふれ粉雪、たんばの粉雪」であることを指摘する。36番の「ころころ馬の子」には、「久敷童謡なるべし、一休物語二蜷川へ此詞有り」と、童謡と「一休物語」との関連を記している。この「一休物語」が、数々ある一休宗純にまつわる物語のいずれにあたるかはわからないが、これら文献を用いた解説部分から、『古今童謡』に含まれるいくつかの童謡が、近世をさかのぼるかなり古いものであることを示唆している。

(4) 『古今童謡』の成立年代

この引用文献からは、『古今童謡』の成立時期も知ることができる。引用文献のうち、最も時代が下るものは、享保3（1718）年の『武林隠見録』である。野間が亡くなるのが享保17（1732）年であるため、『古今童謡』は享保3～17年の間に成立したものであることがわかる。ただし、前述のとおり今回紹介する『古今童謡』は、江戸後期ごろの筆写本であると考えられるため、同書の筆写時期でないことは確認しておきたい。また、この享保年間という成立年代は、次項で検討するように『古今童謡』の底本である『筆のかす』のものと考えられる。

2. 『古今童謡』と『筆のかす』

(1) 『筆のかす』について

次に、『古今童謡』とその底本と考えられる『筆のかす』の関係について検討を行う。

『筆のかす』は、童謡研究者の尾原昭夫によって「釈行智『童謡集』をさかのぼることほぼ一世紀にも及ぶ時代であり、もしこれが確かであれば、わが国のまとまったわらべうた集としてはもっとも古い、画期的な書」と評価されている資料である（尾原 1991）。しかし、原本は散逸し、写本も伝えられていないため、現在のところ、概要を知ることができる唯一の資料は、岩田勝市による翻刻と紹介文である（岩田 1937, 1938）。岩田による翻刻は、昭和12・13（1937・38）年にわたって、鳥取県の民俗研究誌『因伯民談』に「童謡の採集・鳥取地方を中心にして」と題して掲載されたもので、広く鳥取地方の童謡の紹介を行うことを目的としていた。次に、『筆のかす』の概要を知るため、岩田による解説文を引用しておく。

この童謡の採集は今から三十年程前に大体を輯録し、其後添加したのものもありますが、鳥取市中心になつてゐます、但し各地を通じて行はれてゐるものもあります。この輯録について第一に参考になつたものは『筆のかす』といふ写本の端本でありました。著者は義学とありますが如何なる人か明瞭を缺きます。たゞ所々に宝永甲申歳とあれば宝永時代に集めたものと思はれます。その「古昔近代童謡巻拾」といふ分の第一に挙げてある童謡は○橋の下の菖蒲は誰が植えた菖蒲ぞ、じたい殿、たい殿、たいが娘梶原であつて…（後略）

この解説文から、①岩田が参照した『筆のかす』は、野間の自筆稿本ではなく、「写本の端本」であったこと。

②『筆のかす』の著者が「義学」＝野間義学であり、『古今童謡』と同じであること。③書中に「宝永甲申歳（＝宝永元（1704）年）」とあり、それより宝永年間に編集されたものであると推測されていること。④内容は「古昔近代童謡巻□（□内は数字）」という形で区切られ、少なくとも「巻拾」＝10のまとまりで構成されていたことがわかる。

(2) 『古今童謡』と岩田採録『筆のかす』の比較

次に、『古今童謡』と岩田採録の『筆のかす』の内容を比較し、両者の関係について考察していく。それぞれ収録された童謡・童遊の数は『古今童謡』50件、『筆のかす』35件であり、『古今童謡』のほうが15件も多い[なお、『筆のかす』の数は、岩田の論文から尾原（1991）が抽出した数を用いた]。また、『筆のかす』と『古今童謡』の収録童謡の重複関係を検討すると、『筆のかす』の全35件のうち33件が『古今童謡』と重複している（第1表）。なお、重複する33件のうち2件は、『古今童謡』に1件の歌としてまとめられたもので、次の童謡である。

【『古今童謡』】

○座頭の坊のしりに九十虫くじらが取ついてばい付ばい付するよするよ

是は座頭を見て云ふ也、又（同前）しりに尻毛がはえて、おい付おい付するよ、かみそりもつてするよするよ

【岩田採録『筆のかす』】

○座頭の坊のしりに、九十虫が取りついて、ばい付ばい付するよするよ

○座頭のしりに、しりげが生えて、おい付おい付するよ

また、岩田採録『筆のかす』には収録されるが、『古今童謡』に含まれないものが2件あった。

【岩田採録『筆のかす』】

○あとの鼠こい鼠こい何用でおぢやる、ゆうべのゆうべの、かいもちは、猫と鼠がうんなめた

○ちよちちよちちよちや、あワ、やあワ、魚の眼や魚の眼、肘たんぽたんぽや、頭てんてんや、かいくりくりばあ

一方で、『古今童謡』には収録されるが、『筆のかす』に含まれない童謡が18件もあった。これは、岩田の採録から漏れたか、岩田が底本とした『筆のかす』が「写本の端本」であったため、本来収録されているはずの童謡が抜け落ちていたかのいずれかの理由が考えられる。

以上、『古今童謡』は岩田採録の『筆のかす』の童謡をほぼ収録しているだけでなく、それ以上に豊富な内容を持っていることがわかった。このように見ると、『古今童謡』のほうが『筆のかす』よりも先行して存在し、『筆のかす』のほうが後年に編集されたように思われる。しかし、これまでも繰り返しているとおおり、今のところ知られている『筆のかす』は、岩田が同書の「写本の端本」から採録したものであるため、性急には判断できない。それは、江戸時代の記録に『古今童謡』という書名が見あたらないところからも看取される。すなわち、鳥取藩士の岡島正義が文政3（1820）年に編さんした『増補珍事録』のなかに、「筆ノ糟・同人（野間一大嶋註）述作」とある。後述するように、岡島は野間の稿本類をほぼ収集していると思われる人物であり、同人の記録の中に書名が見られないということは、文政3年当時、『古今童謡』は存在しなかった可能性が強い。とすれば、『筆のかす』が先行して存在し、のちに同書を底本として抄録編集されたのが『古今童謡』であると考えることができる。ちなみに、岡島は『筆のかす』のことを『筆ノ糟』と記しており、江戸時代のものと岩田採録ものとは、名称の表記が微妙に異なっていたことが知られる。

また、『古今童謡』という名称の「古今」は、内容の区切りを表す「古昔近代童謡巻□」の「古昔近代」部分を略したものは「古今（近）」に由来していると考えられる。

(3) 『筆のかす』の成立年代

最後に、『筆のかす』の成立時期について考察したい。従来、『筆のかす』の成立年代は、岩田の解題から宝永年間とされていた。しかし、さきほど検討したとおり同書の抄録本である『古今童謡』の内容からすると、『筆のかす』は享保3～17年の間の成立と考えられる。また、野間の年齢を考えても、宝永説であれば10代前半、享保説であれば20代後半～40代ごろの作となり、享保説が妥当だといえる。さらに、後に述べるとおり、野間にはいくつかの稿本が伝えられているが、それらは享保年間に成立していることも享保説を補完するものである。

3. 著者野間義学（宗蔵）について

(1) 野間義学の事蹟

次に、著者の野間義学について見ていこう。野間については、先学によってすでに紹介されているため（浜崎 1974；福代 2003）、ここでは野間家の家譜である「野間左橋家譜」（鳥取県立博物館所蔵）によって事蹟の概略を見ていくことにし、これまでほとんど知られていない野間の著作活動について検討していきたい。

野間義学（宗蔵）は、野間家の5代目として生れた。生年月日は不明であるが、元禄5（1692）年とする説もある（福代 2003）。野間家は、初代が池田輝政に召し抱えられており、義学の父造酒之助は初代藩主池田光仲の御用人を勤めた人物であった。

元禄15（1702）年、500石の知行を相続した野間義学は、「寄合」の席に列し、享保元（1716）年に將軍宣下の使者、同2（1717）年に「物頭」の格式へ進み、同3（1718）年には江戸番頭（江戸詰の平士らを統括する職）として、上野の火事の際、日光門主御殿の警備を行い、同16（1731）年には岡山藩への使者を勤めた。野間は、物頭という鳥取藩の中でも高い格式でありながら、享保17年に亡くなるまで、藩の主要な役職には就くことはなかった。しかし、享保6年には、江戸屋敷での勤功を賞されるなど官吏としても優れていたようである（野間の事蹟については、第3表を参照のこと）。

次に、野間の人物像について、岡島正義の『因府年表』より見ていきたい。岡島正義（天明4年～安政5（1784～1858）年）とは、『鳥府志』や『竹島考』など多くの著作を持つ、近世後期の鳥取藩を代表する考証史家である。『因府年表』は、鳥取藩の歴史を編年体で記したものである（鳥取県 1974）。

第3表 野間義学(宗蔵)の事蹟一覧

年	月	日	事 跡	典 拠
元禄15年	1702	12月	家督相続（500石、寄合席）。初名亀太郎。	家譜・組帳
宝永2年	1705	5月	相続の御礼品献上（「唐金之花入」、「狩野」常信筆三幅対之掛物）	家譜
宝永7年	1710		通称名を「亀太郎」から「内蔵之助」へ改める	組帳
正徳2年	1712		通称名を「内蔵之助」から「右近」へ改める	組帳
正徳4年	1714		通称名を「右近」から「八左衛門」へ改める	組帳
享保元年	1716		將軍宣下祝儀の使者	家譜
享保2年	1717		席次が寄合から物頭に進む	組帳
享保3年	1718		江戸番頭となる	家譜
享保5年	1720	2月	江戸より帰国	因州記
享保6年	1721	3月	「因府上京海道記（『因州記』所収）」を著す	因州記
			藩主より江戸屋敷での勤功を褒賞	家譜
享保9年	1724	7月	『諸家聞書』を著す	十家聞書
		9月	『因州記』を著す	因州記
享保16年	1731	12月	4代藩主宗泰をはばかり、諱を「宗蔵」から「義学」へ改める	因府年表
			岡山への使者。「備前岡山海道記（『因州記』所収）」を著す	因州記
享保17年	1732	7月14日	病死	家譜・因府年表
享保年間か			『珎事録』、『筆ノ糟』を著す	珎事録

【『因府年表』元禄15（1702）年11月14日条】

野間亀太郎へ、亡父造酒之助御用人諱宗在跡目、無相違被仰出、寄合組に被命

案、此亀太郎、後に八左衛門と改名。諱宗蔵、後憚ること有りて義学と改む。頗る好古の人なり。惜哉、天若し此人に寿を假なば、御家の旧記多く伝はる可きに、不幸にして未知命にも不及して享保十七壬子に没しぬ。其墳墓は真教寺に在り。予は、先輩の内にもこの宗蔵を追慕せり

【『因府年表』享保17（1732）年7月17日条】

物頭御鉄砲廿挺野間八左衛門義学前諱宗蔵死去、存命の時、筆稿多し。年命長からずして、遂に其業を果たさざる事、甚だ以て惜しむべし

これらの史料より、野間について以下のことがわかる。①野間は「頗る好古の人」であり、多くの「筆稿」＝稿本があったが、短命であったため完成するに至らなかったこと。②「御家の旧記」など藩主池田家に関する多くの資料を所持していたこと。③岡島が先学達のなかで最も「追慕」していたのが野間であったことである。

また、ここでは元禄15年11月14日条に、のちに「憚ること」があり「宗蔵」という諱を「義学」に変えたという指摘も注目できる。この「憚ること」とは、享保16（1731）年12月に3代藩主吉泰の長子勝五郎（のちの4代藩主）が8代將軍徳川吉宗の面前で元服し、諱字を頂戴し「宗泰」と名乗るようになったことで、そのため同じ「宗」の字を避けたものと考えられる。

(2) 野間義学の稿本類

さて、野間が「頗る好古の人」であり、多くの「筆稿」を持ち、岡島が追慕するほどの史家であったことがわかったが、その「筆稿」にはどのようなものがあつたのであろうか。ここでは、江戸時代に存在していた稿本と現在も所在が確認されているものについて検討していくことにしたい。

まず、江戸時代に知られていた「筆稿」であるが、岡島正義の『増補弥事録』上巻のなかに「本藩事蹟述作之書目」という項目があり、『弥事録（御家之記）』、『為我楽集』、『因州記』、『御家之記』、『筆ノ糟』、『諸家聞書』の6点があつたことがわかる。このなかに『古今童謡』の底本である『筆のかす』（ここでは『筆ノ糟』）が含まれていることは前述の通りである。これらのうち、『弥事録』、『因州記』、『諸家聞書』、『御家之記』の4点が現存しており、いずれも「岡島家資料」として鳥取県立博物館に収蔵されている（鳥取県立博物館 1974）。

野間の稿本が含まれる「岡島家資料」とは、先に紹介した岡島正義家伝来の資料群のことで、同資料群に含まれる野間義学関係史料は、岡島正義の収集によるものである。しかし、現存する野間の4点の稿本は、いずれも岡島正義によって手が加えられている。次に、各稿本の内容と岡島による修正について概略を見ていきたい。

『弥事録』は、文政3（1820）年に岡島によって増補が行われ、『増補弥事録』と書名を変え、現在、上・中・下巻の3冊本として伝えられている。このうち、野間義学が記した部分は上巻の前半部と中巻と考えられ、初代藩主池田光仲が岡山から鳥取へ移封した、寛永9（1632）年以降の「御領知之内之弥事」をはじめとして、「洪水・火災・地震・大風・大雨・大雷・喧嘩口論・敵討・其外騒動成事」や「金銀其外器、或仏像等掘出ス事ヲ記」し、亡くなる享保17（1732）年までの事柄が編年的に記されている。また、上巻の後半部と下巻は、享保17年以降享和3（1803）年までの記録を、孫の若五郎（義厚）と曾孫にあたる民弥（義健か？）が加筆し、享和3年から文政6（1823）年までの情報を岡島が追記している。

『諸家聞書』は、享保9（1724）年7月に野間が「諸家ノ伝説古老ノ物語ヲ聞二任セテ」、着座（家老）の10家についてまとめたものである。その後、天保15（1844）年に、岡島が「諸家聞書」の中から抄録し、『増補十家聞録』と書名を改め、元文以降の情報の追加と校訂を行い、1冊本としてまとめたものが現存している。

『因州記』は、岡島が記した鳥取の代表的地誌『鳥府志』作成において最も参照にされた記録である（浜崎 1974；福代 2003）。同書は、現在4冊本として現存しており、1・2冊目は「道路之巻上・下」として鳥取城下とその周辺地域の地誌がまとめられ、享保9～17年にかけて作成されたことが知られる。また、3冊目は享保5年に記された「因府上京海道記」、享保16年の「因府方備前岡山海道記」を中心に、「系図下目録」、「怪談記」などが収録されている。4冊目は、年中行事や歳時記類、「因幡諺集」、「狂歌集」など、庶民の生活や文化が記録されている。同書も、野間の孫である若五郎（義厚）と岡島（「岳良」名義。この名義は『竹島考』などにも使われている）によって情報が追記されている。

『御家之記』は、岡島によって抄録され『御家之記抜萃』として乾・坤の2冊が残存している。著者は、記されていないが、後半に載せられている「怪談之部」の項目に、朱書で「因州記に載せたり。撰者同じければ、みな享保以前の説なり」と但書がなされていることから、『因州記』の撰者＝野間義学と判断することができる。内容は、藩主池田家や家臣団の鳥取入部以前の逸話を中心に、能筆・画家・細工・名医の話や怪談話など多彩な内容となっている。本書は、岡島の手が加えられた形跡が見られないことから、抜萃ではあるが原本に近いものと推測される。

(3) 「民家」へのまなざし

これら野間の一連の稿本類は、藩主池田家や家臣団の歴史や逸話といった領主階級の事柄を中心としつつも、鳥取城下やその周辺部の庶民の生活に視点が向けられている。とりわけ、野間が「民家」と呼ぶ農民に関する記録を残していることが特徴である。例えば、『因州記』のなかに「因幡諺集」という項目があるが、そこでは因幡地方の「諺」や「民家詞」＝農村に古くから残る言葉、さらに「当国（＝因幡－大嶋註）民家ノ年中行事」をそれぞれ収録している。都市部に同じような事柄や言葉があった場合には収録せず、農村だけに見られるものを収めるという徹底ぶりであった。

野間が「民家」に注目するようになったのは、「民家ノ語二古来ヨリ伝工来ル事多シ」（「因幡諺集」中巻識語）とあるように、農村部に残る古い言葉や伝承への興味関心からであった。これは、「本朝上古ノ語年々ニ亡失スル事ナケカシ故ニ、今民家ニ用所ノ語ヲ聞ニマカセテ記之」（同識語）と、古くからの言葉や伝承が年々失われていくことの危惧へと変わり、それらを調査し、記録することへとつながったのである。

このように、野間自身は支配階層に属しながらも、庶民の生活の中に残る古い文化や伝統に注目し、それらを収集し、記録化しようとする意識は注目に値する。そして、このような意識から生まれたひとつの成果として『筆のかす』（『古今童謡』）を位置づけることができる。同書にも、1番の「橋の下の菖蒲」や36番の「ころころ馬の子」に、「久しき童謡と見へたり」や「久敷童謡なるべし」とあり、ここでも〈久しきもの〉へのこだわりが看取されるのである。

(4) 稿本類の情報源

それでは、このような野間の稿本類は、どのような情報をもとに作成されたのだろうか。『弥事録』や『諸家聞書』、『因州記』といった現存する稿本には、野間が出典を明記するため「考用合符」を付しており、そこから情報ルートを知ることができる。

第1の情報源は、同じ鳥取藩士である。鳥取県立博物館所蔵の「藩士家譜」により人物確定できるだけで32人、確認できないが藩士（東館・西館家臣も含む）と思われるものも含めると、全部で46人にもおよぶ。「藩士家譜」で確認できるこれらの藩士の持高は、200～1300石の中クラスのものほとんどで、野間と同じような石高・格式を持つ家々であった。この中で頻りに接触していたと思われる人物は、絹川弥一左衛門重元（300石）、三沢八郎左衛門貞義（300石）、佐治平右衛門（550石）、安部与兵衛（800石）、河合弥三兵衛秀正（130石）であった。特に、河合弥三兵衛は、文武に秀でた才能を持っていたとされる人物で（鳥取県立鳥取図書館 1969）、野間の父造酒之介以来の付き合いを持ち、稿本のなかによく名前が見られる。その他、故実家で『因府録』の著者として知られる佐藤長健の父長通（200石）からも聞き取りを行っている。

第2の情報源として、寺院がある。興禅寺（藩主菩提寺）や真教寺といった鳥取城下から、高草郡賀露村東禅寺（鳥取市賀露）、邑美郡の摩仁寺（鳥取市覚寺）など城下周辺の寺院の住職から聞き取りを行っている。特に、博学で書を能くしたとされる興禅寺七世住持寂潭からは、聞き取りだけでなく過去帳の提供などを受けており、親密な交際があったことが窺える。

以上のように、野間の情報源は、同じ鳥取藩士や寺院といった、いわゆる上層の身分階級に属するものからの聞き取りや資料調査が中心であった。しかし、これらは藩主や家臣団についての情報が中心で、「民家」に残される文化に関する情報はそれだけで得られたのではない。例えば、『因州記』には、享保7（1722）年8月18日に法美郡宮下村の宇倍神社（鳥取市国府町宮下）を訪れたことや享保8（1723）年5月13日に法美郡百谷村の柳原寺（鳥取市百谷）、享保17（1732）年3月20日に法美郡滝山村光清寺（鳥取市滝山）などを訪問したことが記されている。このように、野間は実際に現地を踏査し、道中で見聞きしたことなどを参考にして、「民家」の古語や伝

承、さらに童謡を収集、記録し、まとめていったものと考えられるのである。

おわりに

『古今童謡』および著者野間義学（宗蔵）について、本稿で述べてきたことをまとめておく。

まず、本稿で翻刻した『古今童謡』は、野間義学『筆のかす』を底本とする抄録本であり、近世後期に作成されたものであると考えられることを指摘した。この『古今童謡』には、因幡地方に伝わる童謡や童遊が50件以上含まれ、近世中期以前の古い童謡が収録されている。

また、『古今童謡』の底本と考えられる『筆のかす』は、原本・写本とも現存せず、これまで昭和初年の岩田勝市による翻刻が唯一の資料であった。今回の検討で、『古今童謡』が、岩田採録の『筆のかす』の内容をほぼ収録しているだけでなく、さらに多くの童謡を収めていることから、『筆のかす』の本来の形に近い資料であることを指摘した。また、『筆のかす』の成立年代は、これまで宝永年間とされてきたが、『古今童謡』で引用されている「武林隠見録」の成立時期や野間の生没年より、享保3年から野間が亡くなる享保17年までの間に記されたものであることがわかった。

この『筆のかす』（『古今童謡』）の著者野間義学は、「頗る好古の人」とされる人物で、数多くの「筆稿」＝稿本をなしていた。そのうち現存する稿本は、藩主池田家や家臣団の歴史や逸話をまとめたものが中心であったが、鳥取城下やその周辺部の庶民、とりわけ「民家」＝農民に関する記録を多く残していた。この「民家」へのまなざしは、年々失われていく農村に残される古い言葉や伝承への危惧から生まれてきたものであった。そして、農村部への踏査などを通じて記録された古語や伝承は、『筆のかす』（『古今童謡』）や「因幡諺集」のような形でまとめられ、当時の農村の生活文化を後世に伝える、貴重な資料として伝えられていったのである。

以上、『古今童謡』と野間義学について考察を行ってきたが、野間の功績についてはほとんど知られていない。鳥取県（1982）などで、本稿で紹介した岡島正義の著作活動において、野間の「遺藁」の影響を強く受けているという指摘はなされてきた。しかし、野間については、『因州記』の一部翻刻が見られるだけで（宇田川 1984；福代 2003）、その稿本類の存在や思想的背景についてはほとんど検討されてこなかった。野間の稿本類を詳しく検討していくことは、近世中期の鳥取藩における文化活動の一端を解明できるだけでなく、近世後期鳥取藩の最も優れた考証史家とされる岡島正義の歴史認識の変遷、元禄～享保期の鳥取城下や周辺農村の様子を明らかにしていくことができる。今後は、野間の稿本類について考察を深めていくとともに、翻刻などを行い、紹介していきたい。

謝 辞

本稿の執筆にあたっては、『古今童謡』収集にあたり貴重な情報をお寄せいただいた尾原昭夫先生、論文執筆にあたり様々なアドバイスをいただいた酒井董美先生には大変お世話になりました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

引用文献

- 岩田勝市（1937,1938）「童謡の採集－鳥取地方を中心にして（明治以前）」『因伯民談』第3巻第5号および第4巻第1号（のち同『因幡伯耆方言輯録』横山書店、1938に所収）。
- 宇田川宏（1984）「（資料紹介）『因州記』に誌された年中行事について」『鳥取民俗』第7号。
- 尾原昭夫（1991）『近世童謡童遊集』日本わらべ歌全集27、柳原書店。
- 酒井董美・尾原昭夫（1985）『鳥取のわらべ歌』日本わらべ歌全集20上、柳原書店。
- 鳥取県（1982）『鳥取県史』5近世文化産業、第1章第9節2主要な史書・地誌。
- 鳥取県（1974）『鳥取県史』6近世資料。
- 鳥取県教育委員会（1988）『鳥取県の民謡－鳥取県民謡緊急調査報告書－』。
- 鳥取県立鳥取図書館（1969）『鳥取藩史』1 世家・藩士列伝。
- 鳥取県立博物館（1974）『資料調査報告書第2集 岡嶋家資料』。
- 浜崎洋三（1974）「『鳥府志』について」『鳥取郷土文化』第45号（のち同『伝えたいこと』定有堂書店、1998に所収）。
- 福代宏（2003）「野間宗蔵の『怪談記』について」『鳥取県立博物館研究報告』第40号。

参考資料

岡島正義『因府年表』（『鳥取県史』6近世資料に所収）、『増補珎事録』、『増補十家聞書』、『御家之記抜萃』（鳥取県立博物館蔵、いずれも未刊）、野間宗蔵『因州記』（鳥取県立博物館蔵、未刊）、『野間左橋家譜』（鳥取県立博物館蔵、未刊）

『古今童謡』 翻刻編

【凡例】

- 一. 本文中には、人権上問題のある部分があるが、学術・資料性の確保の観点から原本のまま掲載した。
- 一. 史料の収録にあたり、編集の都合上、原本の意味を損じない程度に次の方法を用いた。
 - 変体仮名は平仮名に改めた。
 - 漢字は原則として、常用漢字または現在許容されているものに変えた。
 - 句読点、並列点は適宜付した。
 - 踊り字、繰り返し記号は、漢字は「々」、ひらがなは「ゝ」、カタカナは「ゝ」、二字以上の文字は「< 」とした。
 - 誤字や疑いがあるが原本のとおりにした場合は「(ママ)」とした。
 - 本文中のルビは、カッコつきのものは大嶋が、それ以外のものは原本に付されたものである。
 - 原文の文中に文字の記載のない空白部分は「^{空白}」とした。
 - 行改めは原文と一致しない。
 - 註書には、人名、因幡地方の方言等を記した。
- 一. 本文中の図1～8は、末尾に掲載した。
- 一. 史料の解説・校注は、大嶋陽一が行った。

古今童謡 野間義学彙輯

1. 橋の下の菖蒲は

○橋の下のせうぶは、^(菖蒲) たがうへたせうぶぞ、^(誰) じたい殿、^(植えた) たいどの、たいか娘、梶原、今は此句のミを云へり。徒然野槌¹⁾を考ふるに、久しき童謡と見へたり。其は一里^{いち}けんじよ、二けんじよ、三りけんじよ、四けんじよ、しこのはこの上には、^{じつほう} 糸もはもととり、^{空白} 十方ひへ鳥まめなか糸だよ、^(伊東殿) 黒むし八源太よ、^(土肥殿) あめうし、^(土肥) めくらか杖つひて通る所、それはそこへつんのけ、はしの下^(前)の菖蒲は、たがうへたせうぶぞ、いとうどの、といどの、といが娘、梶原源八郎、八のけ太郎殿

武林隠見録²⁾第三の巻に林道春と云者、正保二年³⁾西正月十九日、大猷公⁴⁾の御前にて被召て、御側衆段々道春二尋問はれける内に、堀田加賀守⁵⁾尋て曰、童部共の遊ひに子共を集、左右の手を寄てかそへ、鬼の廻といふ事をする其計へ詞に、たい殿<、たいか娘は梶原あめうし、盲か杖を突て通る所を去八、よつて終のけと云。是もまた故ある事にやと問、道春答て、是八鎌倉右大将頼朝卿⁶⁾の御時、御意二叶ひ出頭し、威を振ひたる人を計へ立る事也。其子^{空白}「^(ママ)」は一台殿と云は御台所政子⁷⁾の御方也。一も台殿、二も台殿二て、綴て計ふへき者なしと云儀也。台か娘と八頼朝卿の大姫君、清水冠者の北の方を云。是又、頼朝卿寵愛の娘にて威勢あり。次に梶原と八、梶原平蔵景時⁸⁾か事也。彼又出頭人二而威を振ふ。次にあめうしと云は、安明寺とて北条時政の妻牧の御方の一族なるか。盲人と成て頼朝卿の御咄の御相手と成、御伽之出頭威勢ある故に御免を蒙り、御座席二も杖を突て歩行す。終のけと八申成へしと云。

2. おじゃれ子どもたち

○おじゃれ子どもたち、花をりにまいろ、花はどこ花、^(前) 地藏のまへの桜花<、^(バット散る) 一枝折ははつとちる、^(結屋) 二枝折れははつと散る、^(結屋) 三枝の坂から日か暮れて、^(結) あんなのかうやに宿かるか、^(結) こんなのかうやに宿かるか、^(恥かし) むしろ八は^(長し) しかし、^(児) 夜はながし、^(傾城) 暁起て空見れば、^(黄金の盃) ちんごのやうなけいせいか、^(据えて) こかねのさかつき手^(黄金の木履)にすへて、こかねのぼ

くりをはきつめて、こかねのぼくとうつきつめて、一はいまいれ上ごどの、二はいまいれ上戸殿、三はいめの肴
(履き詰めて) (黄金の木刀) (突き詰めて) (杯) (上戸) (杯)
 にハ、肴かなうてまいらぬか、われらかてうのさかなには、ひめうりこりあこだうり、あこだにまいたかうの
(我がが) (姫瓜) (小瓜) (阿古田瓜) (香物)
 物

又在郷にては、前は同、おれらかてうのさかなにハ、さるを焼てしぼつて
(俺らが) (肴) (猿) (絞つて)

3. 天が紅

○あまがべに^天、さいて、とうとや、かゝやに、しかられしぞよ
(罵る) (叱られ)

是は、日の暮になりて、かゝやきて空にうつり、紅のこつくになるを見ていふ也
(如く)

4. 次郎よ太郎よ

○二郎よ太郎よ、馬どこにつなひだ、ばん<ばたけに、しころことつないだ、何くはせてつなひだ、わらくは
(繫いだ) (細) (経) (繫いだ) (喰わせて) (繫いだ) (蓋) (喰わ
 せてつなひだ、わらくはせてつないだ、わらの中を見れば、しろい小袖がみつ<、赤ひ小袖が三つ<、三
(蓋) (喰わせて) (繫いだ) (蓋) (白い) (三つ)
 つに成わかうが寺からをりて、はかまきよとおしやる、はかまのこしに何がたつきやうよ、むめろかまろづくし、
若子 (降りて) (袴着上) (仰る) (袴の腰)
 まふりさとうがきのはんな、はんなのうへにとうびかとまる、からすがとまる、からすのくびをひんねじねじて、
(砂糖柿) (花) (花) 鹿 (鳥) (鳥の頸)
 ちやうろにみすれば、ちやうろハかちて、殿様御馬はさんばこハごと<、いちがとゝハやりもち、やりのさき
長老 (見すれば) (徒歩) 扶 箱 (維持)
 をはちがさひて、すばらばんのばん
(蜂) (刺いて) (鳥が留まる) (鳥の首) ねぢ

又、同前、からすかとまる、からすのくびははしあがつた首じや<終

5. 鷺にや尾がない

○鷺にや尾かない、やれはつかしや
二ハ (恥ずかし)

是は鷺を見ていふ詞也

6. からすからす

○鳥<、かめんじよ、おばか家が残るやら、空のはらがあかいそ、はやう行て、水かけ<
え (腹) (赤いぞ) い (掛け)

是は入日の時に鳥をみていふ

7. 跡のからす

○跡のからすさきになれ、さきのからす跡になれ
(鳥) (先) (鳥)

夕暮にからすのとふを見ていふ
ゆうぐれ (鳥) (飛ぶ)

8. 棹になれ

○さをになれ、ひつになれ
(棹) (櫂)

是は空を行鳥の多くつれたちて飛ぶを見ていふ。さをになるとハ、【図1-1】此通二行けと也。ひつになれとハ、
(棹) 与 (櫂)

【図1-2】此通になれよとの事と云

9. 鳶まいろ

○鳶まゝいろ、鼠とつて打上よ、鼠ハいや<、御蔵のまへのいたこそ、よけれ<
トビ (捕つて) ねずみヤ (前)

右は鳶のとをるを見て云なり
(通る)

10. すわすわ

○すわ<

右ハ鳶に鼠をとらする時云。此通いへは鳶多く来る。扱鼠打上れハ故也
(捕らする) (言えは)

11. お月さまなんぼ

○お月さまなんぼ、十三七ツ、なゝをりきせて、京の町にだいたれば、かうがいおとす、はな紙おとす、かうご
(斜織) (着せて) (出い) (筭) (鼻) (筭)
 いこうやのひらう、はな紙はなやかひろう、なけともくれず、わろうてもくれず、なんぼ程な殿じや、油つぼ
(紺屋) が (拾う) (花屋) (泣けども) (笑う)

からひきだいたやうな小男く
右は日暮なれとに月を見つけていふ也

12. 向うの山に

○向ふの山に、猿(留まつて)が三疋とまつて、先のさる(猿)も物しらず(知らず)、跡(知らず)の猿も物しらず(知つて)、中の猿が物しつて、前かけ川に飛
こんで、鯰一疋へさへて¹⁰、手で取もかハひし(可愛し)、足で取もかハひし(可愛し)、あんまりかはひきに(可愛さ)、とうしみでくゝつて(妬心)
おがら¹¹で(字殼)になうて、堂の前にもてきて(括つて)、ちよきくとはやいて(一切れ)、あなたにひときれ(一切)、こなたにひときれ(一切)、もひと
きれ(余つた)、あまつた(纏)、たなのはしにおひたれば(置いたれば)、となりのおまんのちやつととつてくやつた(取つて)、やれはらたちや(喰やつた)、はら
たちや(腹立つ)、それほどはらがたつならば(腹立つ)、むらさき川に身をなぎやれ(投ぎ)、身は下にしづむとも(沈む)、きるものハウへの浮草(着物)
帯は山のくちなは¹²、刀は山のひかりもの(光り物)、ぞうりはうへのどんかめ¹³、ふくり¹⁴は山のこしかけ(草履)、上とをる侍
衆(腰掛)、下を通る商人(うへ)、引きあげてたもれ(通る)、引あげたらバ、何をくりよ(切り麦)、きりむぎ三盃、酒三杯、きりむぎ三ばいく
りやうが、酒三杯ハようくれまい <

13. 雪やこんこ

○雪やこんこ、あられやこんこ、みやまの奥のたびらこ¹⁵や、こんこ <
是は冬雪あられ(降る)のふる頃云、徒然草にふれ < こ雪、たんばのこ雪¹⁶

14. 猪のしし鹿のしし

○猪(み)のしし、鹿(カ)のしし、喰たひか、もんと坊主¹⁷に成たいか くり返し < 云也
是は雪をかためて竹にとほし(固めて)、二人荷ひありきていふ(通し)

15. 大山やまの

○大山やまの雪ころび < や
是は雪をこかして云詞(倒して)

16. 地頭殿鼻の先

○地頭殿、鼻の先にあたらねば(ニヤと云)、咎がない
他の子の鼻の先にあたらぬ程に指さしするか、又は筆二墨など付て云詞也
又だいじやう殿の鼻の先とも云
彈正殿と云事か

17. 座頭の坊のしりに

○座頭の坊のしりに(くじら)、九十虫¹⁸が取ついて、ぼい付 < , すろよ <
クソむしの事か

是は座頭を見て云ふ也。又、同前、しりに尻毛が(生えて)はえて、おい付 < すろよ、かみそりも(剃刀)つてすろよ <
(持つて)

18. あの子はどこの子

○あの子はどこの子、きひやのまゝ子(委屋)、ついたり(繼)、はたいだり(搦いたり)、きびだんご(叩いたり)
他の子を見てそしり云詞(黍団子)

19. あいつが面に

○あいつが(面)つらに(櫓)、やぐらをたてゝ(建てて)、ひとしめしめて、わい < わあ
他の子を見てそしり(誹り)あらそひ(争いて)ていふ詞

20. 齒抜けばば助

○はぬけば(歯抜け)ば(娘)助(な)おとがい七ツ